

# 陳舜臣さんを語る会通信

NO.133 Jan. 2025

発行 兵庫県明石市北朝霧丘2-8-34

橘雄三方「陳舜臣さんを語る会」

Tel. 078-911-1671

編集 「陳舜臣さんを語る会通信」編集委員

発行日 2025年1月1日

## 弟・陳謙臣との共訳『叛旗 小説李自成』刊行（原作 姚雪垠『李自成』）

弟・陳謙臣との共訳『叛旗 小説李自成』は1982年、講談社から刊行され、翌年、第20回翻訳文化賞を受賞した。巻頭、「『叛旗』と李自成のこと 司馬遼太郎」と「監訳者序文 陳舜臣」が付いている。原作は姚雪垠『李自成』。本号では主に徳間文庫版（1992年）を使用しました。（編集委員 橘雄三）

### 「内容紹介」 文庫本キャッチコピー

#### 「上巻」

十七世紀

明朝末の中国。すでに朝は政事に節なく、異民族満鞏子の侵入はほしいまま。野には土匪あふれて、うちつづく凶作に貧窮した民心は、朱家明朝を離れた。反官蜂起した義軍十三家。なかに軍律厳しく、民衆救済を至高の軍紀とした魁雄一人、名を李自成・闖王。だが朝廷軍の各個撃破策に、闖王、孤塁を守るも、ついに潼関南原に壊滅的敗北を喫した。三国志に並ぶ壮大なスケールで描く中国歴史巨篇完訳。

#### 「下巻」

官軍の重囲を、万死に一生を得て突破した闖王軍は、天険の地・商洛山中に兵馬を休めた。かつて十万を誇った軍勢もすでに数百騎。だが民心はすでに朝廷を離れたと信じる李自成は、食糧の欠乏と闘いながら練兵を重ねた。朝廷に投降した義軍に再蜂起の檄を飛ばした李闖王は、合従連衡の秘策を胸に、約束の再挙の日を待った…。



### 「『叛旗』と李自成のこと 司馬遼太郎」より抜粋引用 傍線は編集委員の加筆

王朝の統一能力の衰弱期には、官吏が腐敗して流民がふえ、さらに飢饉などの要素がくわわると、たちまち四方に流民団ができて、私軍として食糧の豊富な地方へ流れてゆく。かれらが首領にかつぎあげる人間こそ、中国の概念でいう英雄である。

流民団の首領は、穀倉地を狙って動く。李自成の時期、これらの首領がむらがり出た。

一方、いまの中国東北地方は長城の外であり、異民族地帯であった。ここで、満洲ソングース語族である女真人がみずから民族を満洲と称し、やがてその地を満洲とよび、ヌルハチとその子孫が同民族を統一して後金という異民族国家をたて、のち清とあらためた。清軍はすでに長城の関門である山海関のおこう側に充満していた。

明はその最後の段階では北京城の守備軍をもたず、その精鋭である呉三桂將軍の軍は山海関の内側を防衛した。陣中、呉三桂は北京の陥落と皇帝の死を知り、敵の清軍と協同して李自成一討つべく山海関の門をひらいた。

著者の姚雪垠氏は、中国の代表的な歴史文学のいない手である。

一昨々年の七九年五月に、大阪東郊の拙宅を訪ねてくださって、当時、すでに中国の読書界の話題の中心だった『李自成』四巻を頂戴する幸運を得た。

大きな印象的な目と、ぶのあつい容貌をもったこのひとに、李自成についていくつか質問した。とくに、呉三桂の愛人で、蘇州の名妓だった陳円々についてきいた。

そのあと、蘇州の円々の旧跡を訪ねたり、『蘇州画舫録』によって当時の遊妓の気分を感じようとしたほどだった。

当時の拙宅には粗末な鉄柵の門があって、入居以来、あけたことがなく錆が赤く浮き出ていた。姚氏らが来てくださるというので、蝶番の錆を槌でたたいて何とか開けた。雑談のなかでそのことをいうと、姚氏はたちどころにボール・ペンをとって、あり合わせの紙片に、

花径不曾縁客掃

（花径會て客に縁りて掃わず）

蓬門今始為君開

（蓬門今始めて君が為に開く）

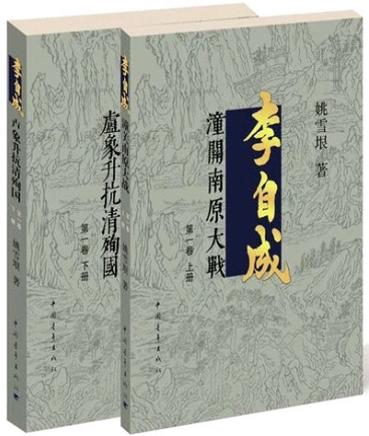
と、書きつけた。この詩が、杜甫が成都郊外の草堂にあったときの詩「客至」のなかの句であることを、私はしばらく気づかなかった。

姚氏がどういう風韻の人であるか、このことによってわずかに察してもらいたい。



姚雪垠氏(1950年)  
中国作家网より転載

## 文庫版『叛旗』巻末「記者あとがき」より抜粋引用



『李自成』第一巻(上下2分冊)  
2013年中国青年出版社  
52元

「記者あとがき」より抜粋引用

傍線及び小見出しは編集委員の加筆

「記者あとがき」は『叛旗』(講談社一九八二)にはなく、徳間文庫版(一九九二)にのみ付いています。

原著書『李自成』の全貌

原著書『李自成』は一九六三年に第一巻(二分冊)が出版された。七六年に第二巻(三分冊)、八一年に第三巻(三分冊)がでて、もっか計八分冊がすでに出版されている。著者によれば、第五巻の初稿は八八年に完成しており、まもなく出版のはこびとなり、それから遑<sup>さかあほ</sup>って第四巻の創作にとりかかる予定だという。さらに全五巻が出揃った暁には、この全文四百万字の大作に修訂をくわえ、最後の定稿本は長篇歴史小説『李自成』を総題目とし、巻ごとに題名を冠し独立の書としても読める全十二巻となる、と著者は遠大な計画を述べている。ことし八十二歳というご高齢を考えると、一日も早い完成を祈らずにはいられない。

補足 ■姚雪垠(1910-99) 八八歳没。

原著者姚雪垠(1910-99)の経歴

記者の責務として、原著者の経歴のあらましをここに紹介しておきたい。

姚雪垠氏は、一九一〇年河南省鄧県西郷の貧しい没落地主家庭の三男に生れた。実は、口べらしのため溺死させられる運命であったが、危うく祖母に助けられて生をえた。幼名を姚冠三と名づけられた著者の人生は、まるで近代中国の苦難の歴史と重なるような、悲痛さを背負っていた。しかし同時代の他の中国作家にくらべ、彼の出生が暗示するごとく、悲惨な中にも幸運の星のもとに生れたという他はない。九歳のとき、家を匪賊に焼かれるが幸いにも難をのがれ、十四歳のおり、県城から帰郷する途上で匪賊に人質として捕まえられ、三か月間も山賊の集団と暮らし、生死の瀬戸際にいながらついに無事生還した。このときの地方下層農民との生活体験が、その後の作家生活に大きな影響をあたえた。彼は述懐している。少年時代のこのような体験が、彼を苦境にあつても物事に積極的な気骨と義侠心のある気質の人間にさせたと思われる。十九歳の年、省都開封にて河南大学法学院に入学し、学生運動に加わるとともに、「雪痕」のペンネームで「河南日報」に処女作の短編小説『兩個孤墳』を発表した。二十一歳に学生運動による逮捕をさけるため北京に逃れ、独学によりマルクス主義史学・文学史家をめざした。この年、筆名を「雪垠」と改めた。一九三八年、香港の「文芸陣地」に短編小説『差半車麦秸』を発表し、茅盾や郭沫若ら大家の高い評価をうけた。四七年、長編小説、『長夜』を出版、その後、各地の大学で教鞭をとりながら作品を発表し、解放後の五一年、上海の大夏大

学の教職を辞し、河南に帰り作家生活にはいる。五六年、散文『惠泉吃茶記』を「新觀察」に発表し、奇しくも毛澤東の注目をひいた。

しかし、五七年の反右派闘争において、彼の気骨ある文言が禍いをまねき、ついに、「極右分子」のレッテルをはられ、中国の多くの同時代作家と同じく、やがて茨の道をあゆむことになる。この不遇の時代に、明末を舞台とする、上は皇帝宰相文人等、下は農民、都城庶民、流民から乞食までを描く百科事典的歴史小説『李自成』を、彼はひそかに書きはじめた。強制労働改造をうけながら、「下放」させられた地方の農村で働きながら、人目を避けて書きつづけた。そのころ彼は、自分の生ある間にそれが世に出るとは夢にも思わず、ただ死後に出版の望みを託していた。その後やがて情勢が良くなり、かれのレットルは剥がされるが、極右派であった作者の歴史小説の出版を関係者は憚<sup>はば</sup>かった。しかし彼は自己の文才と歴史資料の正確さでそれを納得させ、歴史学者呉<sup>ごん</sup>舎の推賞を受ける幸運にも恵まれ、青年出版社の江曉天という編集の伯楽にめぐりあい、六二年八月に、初稿『李自成』の内部審査用の印刷にこぎつけた。さらに多くの知音をえて、六三年七月ようやく第一巻二分冊が出版され、作品が読者に相見えることとなった。(8頁下段へ続く)



茅盾文学賞受賞(1982)  
の頃の姚雪垠氏  
百度百科より

# 『叛旗 小説李自成』 主な登場人物 (同著より簡略化して転載)

## 【閻宮側(李自成軍)】

●李自成 本名は李鴻基。陝西省延安府の農民。明末農民蜂起軍閻宮の首領(閻王)。智勇にとみ、沈着で組織力と統率力がある。

●高桂英 李自成本の妻(初代閻王高迎祥の姪)。沈着聡明で夫を陰に陽にたすける。

●高迎祥 字は如岳。初代閻王。高桂英のおじ。官軍に殺害される。

●劉宗敏 字は捷軒。総哨劉爺とよばれ、自成本の片腕であり勇猛な主将。

●高一功 本名は高国勳(高桂英の弟)。閻宮の総管兼中軍主将。寡黙な猛将。

●李過 字は補之(自成本の甥)。一隻虎という綽号をもつ思慮深い武将。

●田見秀 字は玉峰。長者の風格をもつ閻宮の武将。仏教に関心をもつ。

●尚炯 字は子明。閻宮中では老神仙とよばれている外科の名医。

●郝搖旗 本名は郝大勇。高閻王の旧部下で、のち李自成軍に編属された武将。直情径行。

●牛啓東 字は金星。地方権力者に欺かれた拳人(科挙の郷試合格者)くずれの経綸にとむ知識人。李自成に投じた下取りの参謀となる。

●袁宗第 字は漢拳。やや思慮に欠ける閻軍の部将。

●劉芳亮 字は明遠。閻宮の有能な若大将。

●劉体純 綽号は二虎。閻宮の副将。



●吳汝義 字は子宜。閻宮の中軍。

●黒虎星 本名は馬重喜。土賊の頭目。李過と義兄弟の契りを結ぶ。のちに閻宮に加わる。

●宋献策 牛啓東が李自成本に軍師として推薦する。

●賀金龍 閻軍の将校。官軍の副将賀人龍のいとこ。潼関南原で戦死する。

●王長順 閻宮の老兵。純朴で冗談好き。

●李強 李自成本の親兵頭目。

●李友 劉宗敏の親兵。

●谷可成 閻宮の副将。

●張材 高桂英の親兵頭目。

●李双喜 李自成本の養子。十七歳の勇敢な将校。

●張鷟 孤児。李自成本の養子同然の扱いを受ける美青年将校。

●慧英 高桂英の女親兵。十八歳の沈着でひかえめな娘。

●慧梅 高桂英の女親兵。十七歳の美しい娘。弓術と笛が得意で張鷟に思いをよせる。

●羅虎 十五歳の童子兵頭目。

## 【朝廷側】

●崇禎帝 本名朱由檢。万曆帝の孫。明朝の中興をはかろうと政務に勤むが、外に清軍、内に流賊の朝敵に手を焼く。英明の君主と自負しているが剛毅で独善的であり、臣下にあざむかれる。



●楊詞昌 字は文弱。崇禎の信任のあつい老獪な兵部尚書、内閣輔臣。清軍と和議を計り流賊を平定しようとする。

●盧象昇 字は建斗。文進士出身の勤王総督。忠君愛国の情熱をいだきながら皇帝にうとんぜられ、清兵との戦で悲惨な戦死をとげる。

●洪承疇 字は定九。崇禎帝の信任をうける文進士出身の陝西三辺総督。潼関南原の戦で閻軍を潰滅させる。老練で思慮深い明朝の高官。

●孫伝庭 字は白谷。陝西巡撫として洪承疇と共に李自成本を討ち破るが、驕慢な気性が禍して崇禎の逆鱗にふれ、やがて左遷され投獄される。

●高起潜 皇帝特派総監軍。皇帝側近の太監(宦官)。狡猾で私腹を肥す。

●曹化淳 東廠(皇帝直属特務機関)長官。ひそかに高起潜に嫉する太監。

●王承恩 司礼監兼筆太監(内廷秘書長官)。

●賀人龍 陝西副総兵官。農民軍討伐の勇将であるが、上官の指揮に必ずしも従わない。賀瘋子の異名がある。

●顧顕 盧象昇の召使い。

●李奇 盧象昇の召使いとして派遣された東廠の密偵。

●劉仁達 孫伝庭の中軍参将。李自成本に投降をすすめるに行く。

●熊文燦 農民軍討伐招撫工作の総理。

【他の農民軍】

●張献忠 字は敬軒。八大王の綽号をもち、李自成本とならぶ農民軍陣営の首領。つねに李自成本に対抗意識をもつ。豪放磊落と狡猾細心の性格を併せ持つ豪傑。

●曹操 本名は羅汝才。農民軍曹營の首領。大志を持たず常に李自成本、張献忠、朝廷の三者の間をずるがしこく立ち回る。そのため曹操の綽号でよばれた。

【張献忠側】

●徐以顕 張献忠の軍師。李自成本の殺害をすすめる。

●潘独鰲 張献忠側近の文人。

●張可旺 張献忠の養子。

【李自成本を裏切った人物】

●周山 李自成軍副官であったが官軍に投降。

●高傑 字は英吾。李自成本の妾邢氏とかけおちして官軍に走る。

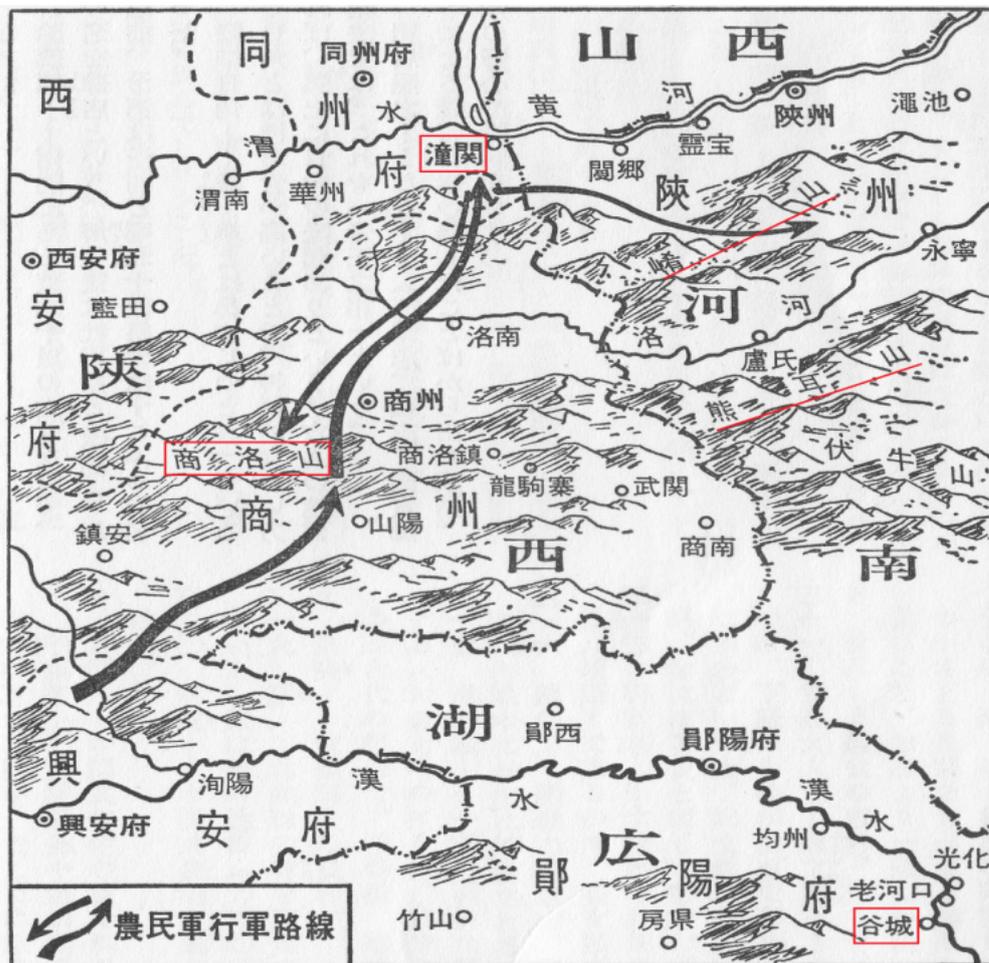
●高見 綽号は大天王。高桂英の兄。高閻王の死後、朝廷側に投降。

■画像、右上は新浪网より

すぐ上の画像、景色は、山海関の城壁からの遠望。中央建築物は鎮東楼(天下第一関)と長城。 Shukousha.com より

『叛旗 小説李自成』 各章内容 第一～十八章は上巻 第十九～三十二章は下巻

章	題	各章内容 ■はキーワード
一	帝の憂い	明の崇禎11年(1638)10月、北京。清兵の侵入により、北京城内は戒厳令下にあった。崇禎帝の時代、清兵の侵入はすでに四度を数え、そのうち三度は北京城下にまで迫った。また、内には李自成ら"流賊"が国家心腹の大患であった。そんな政局にあって、28歳の青年皇帝崇禎は「中興の英主」たろうと必死にあがいていた。崇禎は猜疑心が強く、短気で気性が激しく、仕えることが大そう難しかった。そんな崇禎に気に入られ、上手く立ち回っていたのが内閣輔臣・楊嗣昌と皇帝特派総監軍の高起潜(宦官)で、逆に、忠臣愛国の情熱を抱きながら、意に反して、追いつめられていったのが盧象昇であった。
二	城下の盟	皇帝は盧象昇に、各地から来京する勤王軍の総督を命じ、兵部尚書に任命した。主戦派の盧象昇は、楊嗣昌と高起潜が満洲との和議を主張し、「城下の盟(屈辱的な和議)」を結ぼうとしているとの噂を聞き憤慨する。そしてそれは、ただの噂ではなく、楊・高二人の本心で、盧象昇への執拗な妨害の始まりであった。
三	忠臣の涙	「忠臣の涙」の忠臣とは盧象昇のこと。5万あった配下の兵も、高起潜と楊嗣昌の策謀で一万が残るのみとなった。「(盧象昇は清兵と戦い)『一死をもって国に報いる』という一句をいったあと、胸中が思わずこみあげ、熱い涙がはらはらと流れおちた」。
四	李自成	李自成登場。闖王(ちんおう)李自成と配下の農民軍が描かれる。「潼関南原(どうかんなんげん)の戦」前夜。潼関は陝西省の東端に位置し、陝西と山西、河南を結ぶ交通の要衝で、古より軍事勢力争奪の地であった。
五	官兵雲集	潼関城には官兵が雲集していた。
六、七	決断北進	農民軍は潼関の南130里(1里=500m)にあった。農民軍は食糧が底をつき、早急の行軍を迫られていたが、潼関を守る官軍の指揮官・規模・陣容についての確かな情報がない上、諸将のなかには「潼関を避け、漢中へ向かおう」という意見もあり、李自成は迷っていた。そのような状況下、計画通り、北上し、潼関付近を突破、河南を目指す作戦を決行する。



**潼関南原(どうかんなんげん)**  
 潼関南原の敗戦の後、李自成たちは商洛山中に険要な地を見つけ傷を癒やし時を待った。

**嶠山(こうざん)**  
 潼関南原の敗戦後、高桂英(李自成一の妻)らは、陝西省との省境に近い河南省嶠山(こうざん)のいくつかの山村に住みついた。

**熊耳山(ゆうじざん)**  
 高夫人たちは嶠山での活動のあと嶠山南方の熊耳山(ゆうじざん)に駐留、商洛山の李自成からの合流命令を待った。

**谷城(こくじょう)**  
 投降した張献忠の拠点。湖北省谷城。

左図は徳間文庫版上巻より転載

八 十 二	潼関南原の戦 知謀戦 激戦 天網 包囲突破	<p>潼関城官兵の最高位は、兵部尚書兼陝西・三辺総督洪承疇で、彼に従うのが陝西巡撫孫伝庭であった。二人には、①「李自成と劉宗敏らの巨賊を捕え闕下（けっか 皇帝の面前）に献俘（けんぷ、捕虜を献ずる）すること」、②「流賊」を撃滅した後、速やかに勤王の兵をひきい、清兵との戦いに上京するようとの命が下っていた。</p> <p>官兵の死傷者のほうがはるかに多かったが、農民軍の数にはかぎりがあり、補充することもできず、敗色が濃くなっていった。孫伝庭は洪承疇に「やつらはすでに袋のネズミか釜底の遊魚で投降するか死ぬほかに道はありません」と言い、すでに、「諭降書」まで用意していた。</p> <p>李自成はひそかに自分が洪承疇と孫伝庭の用兵の狡猾さを甘く見ていたことを後悔した。潼関における官軍の兵力を的確に把握できないままに北進するという無謀な作戦によって、惨敗にひんしてしまつたことを悔やんだ。しかしながら、李自成は使者から「諭降書」を受け取り一読すると「鼻で軽く冷ややかに笑つてそれを火に投げ入れ、ゆっくりと燃えつきるのをながめた」</p> <p>農民軍は、少ない兵力を二路に分け、包囲突破を図つたが、次々撃破され、落ちのびた李自成に付き従う将兵は18騎であった。</p>
十 三 十 五	商洛山 練兵 離脱	<p>李自成たちは商洛山中に険要な地を見つけ傷を癒やし時を待とうとした。自成たちの消息に接した農民軍の残存将兵たちがこの地に集まつてきた。これらの兵を鍛錬し、再起に備えた。</p> <p>商洛山中の糧食は困難を極めていた。十分な食事の与えられない中、疾風迅雷の練兵と厳しい軍令・軍律についていけない兵もいた。特に、途中から李自成軍に加わつた兵に多かった。逃亡した兵は追捕され斬首された。そんな時、主たる将領の一人が70余人の兵ごと離脱するという事件が発生する。この時、李自成は餞別まで与え追わなかった。</p>
十 六 十 八	谷城 帝王の相 密約	<p>張献忠が、本心からか偽かは別にして、帰順（朝廷に投降）した。以後、表面的には、湖北省の谷城（こくじょう）一帯は、すこしばかり太平の気運がただよっていた。しかし、朝廷は、一帯に兵力を駐留させると共に随時、見張りの監軍を谷城に派遣するなど張献忠に気を許さなかった。</p> <p>張献忠も、十万の兵の糧餉（りょうじょう 食糧）、正式の職銜（しょくかん 官職）と関防（官職の印章）を要求し、朝廷の出方をうかがっていた。</p> <p>商洛山中にあって李自成は、「ののしるだけではしかたがない。張献忠は数々の短所とともに多くの長所を持っている。大所高所から物ごとを見るべきで、可能な限りはやく彼をこちらに引きずり込む策を考えよう」と、張献忠の投降に憤慨する諸将を抑えた。そして、わずか、小将二人と50人ほどの騎兵を連れ谷城行を決行する。</p> <p>二人の間には紆余曲折があつたが、張献忠は、用心しながらも李自成との再会を喜んだ。しかし、張献忠の軍師は、李自成と会つて自成に、「帝王の相」を見て、「総帥（張献忠）と天下を争うことのできるのは、自成のみです。この機会に彼を消してしまわねば将来に禍根を遺すことになります」と訴えると同時に、独断で、毒殺まで考えるが…。</p> <p>李自成は「いつの日にか天下を取つたとき、おぬし張献忠が民百姓に仁義をおこない、仲間にはたいしては寛大で度量がひろく、冷酷でも嫉妬ぶかくもなく、功臣を殺戮するようなこともしなければ、それがし李自成は鎧を解いて田に帰り、一人の堯舜（ぎょうしゅん）の民となるつもりだ」と述べ赤心を吐露した。張献忠は軍師の謀略を退け、李自成との間に、「来年の麦の穫り入れ後、端午の節句の一兩日のちに決起する」との密約を交わす。</p>

中国史随想『風を観る』 「李自成」をめぐる「抜粹転載」

二週間ばかりのアメリカ旅行に、どんな本を持って行こうか、考えているところである。あまり荷物になつては困るが、かといって字の小さいのは、年のせいで目が疲れ、目ばかりではなく神経まで疲労するのでよろしくない。

いつか読もうとして、なかなか読めない本がよい。いろいろ考へて、北京から送つてもらつた姚雪垠の『李自成』をたずさえて行くことにした。私には自分の小説の中で、李自成を登場させたところがある。それは『風よ雲よ』という小説で、主人公は鄭成功の父親の鄭芝龍なので、李自成は主役ではなく、いわば副次的人物にすぎなかつた。湖北省図書館を自由に利用できた姚雪垠とちがつて、私は手もちの資料だけで書いたのだから、李自成認識については、私は彼に遠く及ばないだろう。

初出は『季刊 歴史と文学』第23巻（一九七八年秋号）

補足 ■文中の陳舜臣さんのアメリカ旅行は一九七〇年五月



『風を観る』表紙  
毎日新聞社

十九	虎を山へ放つ	崇禎9年(1636)、初代闖王が亡くなり、李自成が二代目闖王に推されたことは、同じ闖将の一人、張献忠の強い嫉妬を招いた。この度は、自成が戦いに破れて身を寄せてきたので、積年の怨念や嫉妬心がしばし抑えられ、侠気がかき立てられて密約を結んだ。他方、「絶対に虎を山に放してはなりません!」と迫る軍師らの気迫に心が揺れるが、結局、「献忠は首をたてにふって許すこともせず、かといって首をよこにふって拒むこともせず、だんだんと遠くへ去っていく人馬の影に注目しながら、右手でそのかすかに茶色がかった長いひげをなでていた」
二十、二十一	嶠山の雪 潼関城急襲	潼関南原の敗戦後、安否の気遣われた高桂英(李自成の妻)らは、崇禎11年(1638)11月初旬、陝西省との省境に近い河南省嶠山(こうざん)のいくつかの山村に駐留していた。桂英は娘、女親兵らと数軒の茅ぶき小屋に分住し、足の矢傷の苦痛をおして、連日、闖字の大旗の刺繍を続けていた。
		高夫人は村の元気な婦人を潼関に遣って情況を探らせた。そして、官軍が闖王どころか主だった大将をひとりも捉えていないのみならず、戦場においても彼らの屍体を捜し出せないでおり、しかも闖王の残存部隊は商洛山中に逃げこんだという噂が伝わり、官軍が商洛山に向かって侵攻しようとしていると報告した。
		高夫人に付き従う将兵は、夫人の作った闖字の大旗をかかげ、はぐらかし作戦で官軍の目を自分たちに向けようと軍事行動を起す。
二十二、三	権臣内にあり 断頭將軍	本作品において、姚雪垠(ようせつぎん)は農民軍を義軍・善玉、官軍を悪玉として描き、朝廷の中にあっては、忠臣愛国の情熱をいだきながら皇帝にうとんぜられ、清兵との戦で悲惨な死をとげる盧象昇を善玉、皇帝の信任あつい老獪な権臣楊嗣昌と、彼と気脈を通じる皇帝側近太監(宦官)高起潜を悪玉として描く。
		断頭將軍とは、徹底抗戦し、死んでも屈しない將軍のことで、ここでは盧象昇の戦いと死に様をいっている。
二十四、五	焦眉の急 深謀	散逸していた人馬がぞくぞくと商洛山へ帰還してきた。それに、李自成は、食糧を放出して附近の村の貧しい農民を救済した。食糧調達は、まさに焦眉の急であった。諸将相談の結論は、"富ながら仁あらず"の寨を攻め落として食糧を奪うことであった。狙いは、急峻な地形の上、多くの郷勇で防備し、豊かでありながら農民軍の要求を無視していた寨で、李自成たちは深謀遠慮、被害少なく攻め落とし食糧を奪う。■郷勇(富豪・郷紳の多い村は官兵に協力した。自らも義勇兵を出して山寨の如く防御、農民軍から村を守った)
二十六	灯市	清兵の主力が山東方面に移動し、洪承疇、孫伝庭ら、援軍も続々と畿輔(きは 都の近郊)に到着したので、北京城の局勢はかなり緩和され、年に一度の灯市もはじまった。正月八日から十七日までの十日間、いくつもの通りに市がたち、夜は灯籠の見物で賑わった。この時期、農民軍の名医尚炯は、一つには都の情況、朝廷の動静を知るため、もう一つは牛啓東という河南の拳人に会うため北京にいた。
		農民軍には将領は揃っていたが軍師が欠けていた。強いて言えば、李自成が軍師を兼ねていたといえる。尚炯には、軍師にふさわしい人という時、心当たりがあった。それが古い友人牛啓東で、裁判沙汰に巻きこまれて上京していることを知っていた。古い友人とはいいながら、多年、会わなかった二人だが、このたび出会い、一緒に食事をしながら、また、灯市を歩きながら、尚炯は思いきって軍師依頼を口にし、李自成の人物を語った。牛啓東は辞退していたが最後には、西安までの同道を承諾した。
二十七	大義親を滅す	ある夜、近くの村で、四人連れが婦人を強姦するという事件が起こり、調べると李自成が目をかけている従弟らであることが判明した。李自成軍の軍律では、「婦女を姦した者はすべて斬る」となっている。しかし、許してやるように頼む将兵が幾人もあり、また、従弟の幼年時代をよく知っている李自成は悩み迷う、が…。「軍を治めることは、国を治めることと同じだ。大義親を滅しても、私情によって法を廃すべからずである。はやく殺せ!」
二十八	梁山泊	牛啓東が商洛山にやってきて、農民軍の生活を見て回り、李自成にいくつも質問した。自成から一人の将領の経歴について聞いた後、啓東が「彼もやはり、追いつめられてやむなく梁山泊(りょうざんぱく)に登ったということですか」と言った。自成は「ほとんどの人間が、みな追いつめられてやむなく梁山泊に逃げこんだといえます。もし生きてゆけるならば、誰がすき好んで造反に加わったりしましょうか? 賊名をきせられるうえに、いつ首を取られるか分らぬ日を送るのですから。相当の苦しみを味わった者でなければ、腹を決められるものではありません」と答えた。
		牛啓東は震える声で言った。「郷里にもどってすこしく仕事を片づけましてから、かならず家族をつれてまいり、將軍の旗のもとに長くとどまり、犬馬の労をつくし、大業の創建を補わせて頂く所存でございます」

二十九	再蜂起	張献忠が朝廷に要求していた、十万の兵の糧餉(りょうじょう 食糧)、正式の職銜(しよくかん 官職)と関防(官職の印章)のどれ一つも実現しなかった。張献忠は、李自成との密約通り、端午の節句を期して再蜂起した。端午の節句の二日め、すなわち西暦1639年6月6日は、明末の農民戦争史上におけるきわめて重要な日となった。
三十	灯花	崇禎12年5月初旬、高夫人たちは、嶠山(こうざん 第二十章)南方の熊耳山(ゆうじさん)に駐留、すでに出発準備を整え、商洛山の李自成からの合流命令を待っていた。高夫人は自成と張献忠が端午の節句を機に兵を挙げる約束を交わしたことを知っていたので、気が気でなかった。やっと、闖王の手紙を携えた男がやって来た。手紙には「昼夜兼行で商洛山へ来るように」とあった。それに、男は、途中、官軍に捕えられ、6、7日間ひまどったという。高夫人率いる将兵は熊耳山を出発、商洛山への道を急ぐ。
三十一	叛旗ひるがえる	<p>商洛山中の農民軍に悪疫が拡がり、主だった大将のほとんどが病に倒れていた。そんな時、張献忠の使者が商洛山にやって来て、「もともと決めていた期日は不変で、かならず五月の六日に谷城で義旗をあげる」と張献忠の言葉を伝え、「わが軍の大帥がいはれるには、今あなたの所には人馬が少なく、糧草にもこと欠いていることはよくわかっているの、もしも端午の節句のあとすぐに大旗を挙げられなければ、無理をすることもないとのことです」とつけ加えた。そして、使者は、「商洛山の農民軍中の疫病のことは谷城にも伝わっていたが、こんなにひどいとは思わなかった」とも言った。</p> <p>李自成の側近諸将の誰もが闖字の大旗を掲げることを先に延ばそうと勧めたが、自成は、「お前さん方は、敬軒(張献忠)が言っているのが本心だと思うかね?」、「わたしが裏切るのを恐れているので、人を遣わして動静を探ろうとしたんだ」</p> <p>「このような大事の瀬戸際で、われわれが畏縮して進まないでおれば、朝廷に全力で張献忠を攻撃させることになる。それでは友達を売ったことになるではないか? こんご敬軒はわれわれをどのように見るだろう? 各家の義軍はわれわれをどう見るだろうか? 今後、われわれが言ったことを、誰が信用するだろうか? 誰がわれわれと共に官軍に反抗しようとするだろうか? 歯をくいしばってでも、あえて危険を冒してこそ正道といえるのだ」</p> <p>端午の節句が過ぎて一日たち、李自成は、高夫人らが帰るのを待たず、献忠との約束を守って、商洛山中において大旗をおし立てた。</p>
三十二	亡国の星象	「霊台(天文台)太監(たいかん 宦官の官署の長官)の観察しえた星象(せいしょう 天体の様子)と運勢の変異の十中八、九は不吉なものであった。これが崇禎の憂いを増した。彼は口では自分を「中興の英主」と言っていたが、心の中ではだんだんと「中興」の望みはなくなり、つねに亡国の予感さえしていたのであった。とくに、洪承疇と孫伝庭が力をふりしぼってもなお李自成を潼関附近で撲滅できなかったことで、国運のおもむく所は、彼にとってさらにはっきりとしてきたのである」

### 補足 俗言(ぞくげん ことわざ)二つ

「叛旗小説李自成」には俗言がよく出てくる。その二つを紹介します。

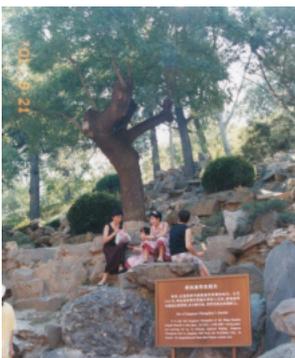
伴君すること  
伴虎のごとし

青年皇帝崇禎は万曆帝の孫である。お祖父さんは、いっさいの国事を側近の太監(宦官)たちにまかせっぱなしであったが、崇禎は、夜を徹して、みづから文書を批閲し、詔勅を起草し、「中興の英主」たらんとした。が、ますます政情は悪化していった。

このような崇禎の努力が空回りしたのには、内憂外患が大きかったが、その性格も原因していた。

(朝臣は) 接見をうけるたびに、恐怖と不安を免れることができなかつた。というのも皇帝が猜疑心のつよい、片意地で勝手気ままなうえに、短気で気性の激しい人間であることを知りぬいていたからである。

結果、村度朝臣が皇帝に多用されることとなった。



故宮の裏山、景山「崇禎帝自縊処」の標識

夜長ければ夢多し

姚雪垠氏はこの言葉がお好きなようだ。違った場面、数力所に出てきます。

まず最初、第十八章です。李自成は谷城に張献忠を訪ね、翌年の端午の節句を期して決起することを約す。この時、李自成は、自分が帰ったあと夜長ければ夢多しの例えのごとく、献忠が気が変わって約束をとり消すのではないかと心配する。

二つ目は第二十四章です。商洛山中にあって、食糧不足打開が焦眉の急となり、李自成は、「富ながら仁あらず」の寨を攻め落とし食糧を奪う計画を実行する。この時にもこの言葉が出てきます。

もう一箇所は第二十七章、「大義親を滅す」の章です。

陳舜臣『風よ雲よ』 司馬遼太郎『韃靼疾風録』 1979年姚雪垠氏来日

だったんしっぷうろく

ようせつぎん

見出しの三つの言葉がどう絡むのかを見ていきます。

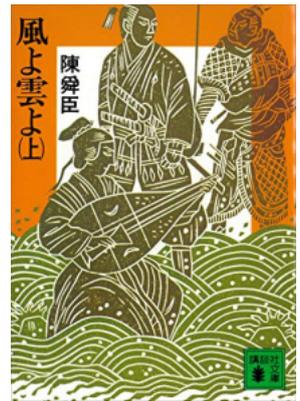
明末、万里の長城の東端、山海関を守る明の武将、呉三桂と美妓陳円円との出会い、呉三桂の円円への執着についてはよく知られた故事で、陳舜臣さんの『風よ雲よ』や司馬遼太郎さんの『韃靼疾風録』では多くの紙幅が割かれています。執筆

(初出)は、『風よ雲よ』が北海道新聞で、1971年6月15日～72年6月27日夕刊連載、『韃靼疾風録』は『中央公論』で1984年1月号～1987年9月号連載です。

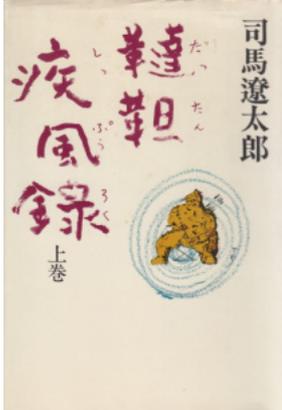
長年、漢籍に親しんできた陳舜臣さんにとって、このテーマは、もとより、自家薬籠中の物といえます。

司馬遼太郎さんも中国史に詳しいのですが、1979年、姚氏の来訪時に、「李自成についていくつか質問した。とくに、呉三桂の愛人で、蘇州の名妓だった陳円円につ

いてきいた」、そしてそのあと、「蘇州の円円の旧跡を訪ねたり、『蘇州画舫録』によって当時の遊妓の気分を感じようとしたほどだった」とおっしゃっているように、姚雪垠氏との出会いが『韃靼疾風録』執筆のインセンティブとなったことは確かです。



講談社文庫版表紙



中央公論社版表紙

『李自成』第一巻、全文の訳出は陳謙臣さん、その後、陳舜臣さんが監訳

「監訳者序文 陳舜臣」抜粋引用

傍線は編集委員の加筆

本書の第一巻が中国で出版されたのは一九六三年のことで、空前のベストセラーとなり、いまなお広く読まれている。文革の一時期、この作品も批判を受けて禁書となったが、それでも人びとはこの浩瀚な小説を手写して、ひそかにまわし読みしたといわれる。

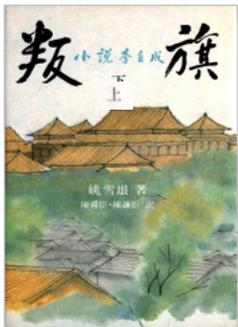
本書で訳者を悩ましたのは、李自成が活躍した河南地方の方言がしきりに出てくることだった。なかには、河南の人にきいてもわからないことばがあった。そうしたものはリストをつくって、中国へ行ったとき、原作者の姚氏にじかにたずねた。「わからないはずだよ、土匪のことばだから」と、姚氏は愉快そうに笑って解説してくださった。

全文の訳出は陳謙臣がこれにあたった。できるだけ原文に忠実に訳している。私があとで訳文を検討したが、原文に忠実すぎて、日本語としての流れに影響があるとおもわれたところも、あえて大きな修正を加えなかった。この小説の魅力は、あきらけい豪放な怒濤であり、さらさら流れるおだやかな小川のそれではないとおもったからである。

■監訳とは何？

一つは翻訳者が行った日本語訳が学術的に誤りがないかどうか、よりふさわしい表現がないかについて監修すること。

もう一つは、監訳者の社会的名声・信用によって、その書籍に対する評価を高め、権威づけを行うこと。



『叛旗上』表紙 平山郁夫画 講談社

2ページ「訳者あとがき」の続き

文化大革命中、毛沢東の一声「姚を保護するように」

六三年七月ようやく第一巻二冊が出版され、作品が読者に相見えることとなった。その秋、彼は妻の王梅彩とともに武漢から、「李自成」を自信をもって毛沢東主席のもとに郵呈した。この積極的行為がのちのち幸いした。六六年五月、全国的に文化大革命の嵐が吹き荒れ、もと極右分子の作品「李自成」は、もちろん武漢地区造反派の出した「毒草百種」に列された。彼は紅衛兵の家宅捜査をおそれ、貴重な原稿の焼却を余儀なくされたが、当時、多くの作家が致命的な打撃を受けたのに比べ、案ずるほどの危害を受けたのに比べ、後々に知るところになるのだが、六五年八月、中央での会議の席上、毛沢東が中共湖北省第一書記の王任重に、「姚雪垠の『李自成』第一巻を読んだが、なかなかよく書けている。武漢市委員に言って、続けて書きおえるよう、姚を保護するように」と伝え、王は武漢市第一書記の宋侃夫に指示したという。



毛沢東